

# 総義歯患者の咀嚼運動に対する治療効果について

著者	倉持 淳子
学位名	博士(歯学)
学位授与機関	日本歯科大学
学位授与年度	2018
学位授与番号	甲第1186号
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1102/00000864/">http://id.nii.ac.jp/1102/00000864/</a>

氏 名(生年月日)	倉 持 淳 子 (昭和62年 8 月24日)
本 籍	東 京 都
学 位 の 種 類	博 士 (歯 学)
学 位 記 番 号	甲 第 1 1 8 6 号
学位授与の日付	平成31年 2 月 6 日
学位授与の要件	
学 位 論 文 題 目	総義歯患者の咀嚼運動に対する治療効果について

論 文 審 査 委 員	主 査 荻 部 洋 行
	副 査 五 味 治 徳
	今 井 敏 夫

## 論 文 内 容 の 要 旨

総義歯患者の咀嚼運動に対する治療効果を明らかにする目的で、新義歯製作を希望する総義歯患者48名（新義歯群）と義歯に満足し、良好な咀嚼能力を有する総義歯患者20名（Control, C 群）にグミゼリーを咀嚼させたときの下顎切歯点の運動経路のパターンを7種類に分類後、各パターンの発現数を調べ、新義歯群の治療前（BT 群）と治療後（AT 群）との間で比較した。次いで、咀嚼運動の空間的パラメータ（開口量と咀嚼幅）、時間的パラメータ（サイクルタイム）について、BT 群と AT 群との間、AT 群と C 群との間で比較し、以下の結論を得た。

1. BT 群の咀嚼運動経路は、種々のパターンを示したが、AT 群の大多数は、健常有歯顎者の代表的なパターン（ⅠまたはⅢ）を示した。
2. AT 群の83%と C 群の80%がパターンⅠまたはⅢを示した。
3. 総義歯補綴治療と咀嚼運動経路のパターンとの間に有意な関連が認められた。
4. 開口量と咀嚼幅は、AT 群のほうがBT 群に比べて有意に大きく、サイクルタイムは有意に短かった。一方、AT 群と C 群との間には有意差が認められなかった。

## 論 文 審 査 の 要 旨

咀嚼機能を客観的に評価するために、咀嚼時の運動経路や運動リズムの分析が試みられているが、有歯顎者を対象とした研究が多く、総義歯患者の咀嚼運動は明らかにされていない。本研究は、総義歯患者の治療前後の運動経路のパターンと空間的・時間的パラメータを分析したものである。その結果、総義歯患者の咀嚼運動は、歯科補綴治療により、経路のパターンが健常有歯顎者の代表的なパターンに変化すること、運動が大きくなり、速くなることが示唆された。

以上は、総義歯補綴治療における咀嚼運動の評価に際し、貴重な資料を提供するものであり、歯学に寄与するところが多く、博士（歯学）の学位に値するものと審査する。